

【前頁より】支えてやりたいと思います。ご期待に添えるような結果を、残せるかどうか分かりませんが、皆様どうぞ応援宜しくお願い致します。この様な掲載の機会を頂きましたことに深く感謝いたします。ありがとうございました。

勉強会を開催しました 「事業所での利用者の高齢化問題を考える」

6月21日(木)市立社会福祉センター会議室において勉強会を開催しました。知的障害者・事業所での利用者高齢化問題を考えるというテーマで、(社福)大阪手をつなぐ育成会 支援センターい〜な統括所長 竹内裕幸氏に色々とお話を伺いました。

支援センターい〜なでは、施設入所支援を行う「箕面育成園」と生活介護・就労支援事業所とケアホーム事業を行う「い〜なグーテン」との2つの施設からなっています。箕面育成園での利用者の最高齢は79歳とのことです。同園では日常生活場面での個々への介護支援が日常的に行われており、転倒防止のためにベッドから離れると音が鳴る離床センサーの活用や、ミキサー食を固形にした摂食回復支援食を提供したり、特殊浴槽の活用等で高齢化に対応をされています。

事例に基づいた話のなかで、一番大きく採り上げていたのが、最近に園としてはじめてターミナルケアに取り組まれたことです。その利用者が余命いくばくもない状態であると判明して、ご本人や家族との話し合いをおこない、ご本人の希望を大切に考え、ターミナルケアに取り組むことを決めました。地域医療との連携や対応チームを編成して、ご本人の日常生活の充実や心のケアに取り組む、最期は女性職員全員に見守られるなか息を引き取られたそうです。この事例では、医療ケアの度合いが大きくなかったが、さらに高齢者が増えていくなかで、今後もうまく行えるのかという不安はあるが、ご本人が住みなれた環境で暮らし続けるために、家族や地域と連携しながら高齢化によるターミナルケアに前向きに取り組んでいこうという姿勢を示されていました。

竹内所長は「親なき後、一生涯安心して暮らせる施設を」という親の願いに応えていくというのはどういうことなのか、このテーマへの答えを探し続けていかれるとのことでした。

現在構想していることとして、

- ・ 人生の最終ステップの「支援プログラム」を家族の協力で策定できること

- ・ 介護保険制度との好ましい連携
- ・ 最後まで生きがいのある生活と活動をサポート
- ・ 入院しても退院時に医療ケアが必要ないなら再受入れが前提
- ・ 地域医療との連携強化
- ・ 「これだけしかできません」ではなく、「どうしたらよいか」を考える。
- ・ ターミナルのありかたとして、今回「最期まで私たちのそばにいてくれてありがとう」が加わった。これらは今後も随時改良を加えながら進めていければとのことです。

これからますます大きな課題となってくる高齢化に向け、ノウハウがまだ確立していないなかでは、手探りではあっても前向きに取り組むことが益々必要となるでしょう。そのための心構えや姿勢がひしひしと伝わってくる勉強会でした。

大阪市 市政改革プラン

～最終改革案公表される～

以前にも大阪市の市政改革プランの概要案についてお伝えしましたが、市民からのパブリックコメントを踏まえて、その最終改革案が公表されました。

その結果、109事業にわたる住民サービス見直しの削減額は、前回発表時の素案と比べると89億円少なく約399億円にとどまりました。

大阪市ではこれらの改革を実施しても、今年度の一般会計で約500億円の財源がまだ不足していると試算しております。

そうしたなかで、この市政改革プランの方向性についてみていくと、将来像・めざす姿と改革を進めるにあたっての3つの柱を掲げています。

「大きな公共を担う活力ある地域社会づくり」

「自律した自治体型の区政運営」

「ムダを徹底的に排除し、成果を意識した行財政運営」

となっています。

これらの柱のうちから第1番目の地域社会づくりに着目して、具体的な構想がどういったものかを、アクションプラン編の部分から採り上げておきます。

1) 豊かなコミュニティづくり

→あらゆる世代を対象として、地域における「つながり」や「きずな」の大切さを伝えるとともに、人と人とがつながるための機会づくり